

慈雲

1号

2005/10

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@ybb.ne.jp

SinsyuuOotaniha

JiunzanZuirenji

Jiunkai



声に出して
称えるも念仏
心に信ずるも
念仏

【表紙の言葉】

声に出して称えるも念仏
心に信ずるも念仏

そが りょうじん
曾我 量深

声に出して「ナムアマミダブツ」と称えることがお念仏だと思われていますが、心に信ずるのもまたお念仏であると曾我先生はお教えてくださいます。

お念仏のある人、それは仏さまを念ずることのできる人です。

その人は仏さまによって「自分自身」を喚びさまされた人であり、この世に灯火をとます人でありましょう。

そして、その人の口から出る

お念仏は報恩謝徳のお念仏です。

十一月は報恩講の月です。詳しくは最後のページをご覧ください。

『正信偈』に学ぶ

今回は彼岸会法要の際、よく床の間に掛けていますお軸「正定之因唯信心」についてお話をいたします。

「正定の因は唯信心である」と読みます。

これは親鸞聖人がお作りになった「正信偈」の中の一句です。

曇鸞大師の教えを親鸞聖人が受けとって書かれた言葉で、「どうしたら正定になれるか、それはただ信心ひとつである」という意味です。

正定とは正定聚の略で、“まさしく浄土に生れることに定まった人びと”ということですよ。

今日、浄土に生まれることは死後そのような世界へ参ることと考えられています。親鸞聖人は死後のことはいわれません。現に生きてこの世において正定聚の位に定まるいいかえますと求道に立つ、求道精神に生きるといふことです。それを“往生”といいます。往生は、今この生活において求道に立ち上がることを意味しますが、それはどうすればできるかといひますと「唯信心」である、

その他に方法はないといわれているのです。

さて、曇鸞大師は中国の北魏の出身で、今からおよそ千六百年ほど前に活躍した方です。初めは四論宗という仏教を学んでいましたが、五十歳の頃に病気になる、まずは丈夫な体をつくらなければならぬと考え、中国の南方へ長生不死の経典を探しに行きます。しかし、その帰途、法友の菩提流支に会い仏教こそが本当の長生不死の法だと叱られ、「浄土論」を与えられます。曇鸞大師はそれを読んで感動し、苦勞して集めた長生不死の経典を焼き捨ててしまいます。この出来事が曇鸞大師の目覚めの体験の時であります。「まず長生きを」という考えをすてて本願に目覚めたのです。自分の過去、背景にずっと願いかけられているものがあつたことにはじめて気づいたので、これを“廻心”といいます。

『浄土論』は、浄土はどのような世界であるかということが二十九通りに書かれています。たとえば浄土はうるおいのある世界であると書いてありますが、曇鸞大師はなぜ阿彌陀仏はそのような世界を建てようという本願を起されたのかと自問されるのです。そうす

ると、それは私たちがうるおいのない生活をしているからだ、その人間の世界をうるおいのある世界にしたいという、それが本願だということに気づいたのです。うるおいは精神的な豊かさということですが、曇鸞大師は浄土のあり様を聞いて、逆に自分はどういう生活をしてきたのかと反省をするわけです。これが大切なことです。

自分は一体どんな生活をしてきたのだろう。そういう自分だからこそなんとかしたいという願いかけをまた感じるんです。その反省を懺悔といひます。懺悔と喜びは表裏一体です。親鸞聖人の教えで信心というのはこの懺悔のことをいひます。

自分を知ると仏さまを知るとはひとつなんです。

本願の呼びかけに気づくとき、おのずからうるおいのある生活が開かれます。教えを聞くその人自身がまずうるおい、その家庭がうるおいのある豊かな家庭になります。そこを浄土といい、そのように定まった人を「正定聚」の位に定まった人といひます。



慈雲会の会報の1号をお届けいたします。
なにとぞご意見等お聞かせください

会則にもありますが当会は瑞蓮寺の聞法会というか護持会というか皆様の集りです

さて昨年十月三十日住職継承法要の節にお配りしました同朋手帳を1ペーシでもお読み頂きましたでしょうか皆様 瑞蓮寺の法要にご持参ください 出席の判を押させて頂きます

尚お読みになって判り難い所があると存じますが ぜひ聞法して ぼちぼちでも心に刻み込んでください

平成も一七年になって世の慣わしが変わってきました地球を見渡すと実に複雑怪奇です

これから日本人が世界に通用するには 私達 勉強を一生せねばならないと思います

不得意な科目もあるでしょうが その人の得意とする事から とまかく勉強して頑張りましょう

次に自然環境です 地球の環境を考えて自分の身の周りから何か始めましょう

うつくしや野分の後のとうがらし

蕪村

終りに編集部門の方々大変ご苦勞と感謝します

会長 中尾

【寄稿】 親の背を見て子は育つ

私事で申し訳ありませんが、私は西本願寺に近い所で生まれ、小学校一年までそこで育ちました。

母は夕食の片付けが済むと御仏壇に向かって静かな声で正信偈さんをあげていました。

後に聞きましたら、私の次兄と、生まれても生を享けられなかった幼子二人の三人を亡くしていました。

祖父母は朝夕本願寺にお詣りして、総会所でお説教を聞いて来ました。

家に帰るとその日のお説教を二人で話しあっていました。

ある日「ありがたいやないか。違う道を行こうとすると阿弥陀さんが襟首をつかまえて引き戻して下さる。」と、後年になって私は「撰取して捨てざれば……」のお言葉に逢い、祖父の言うてはった事はこの事やったのやな、と思いました。

戦後満州から引揚げて来た父は母と共に小山法城和上に順事し聞法しました。

郷里の人々にも聞かせてあげたいと、和上のお供をして再々鳥取県浜村で法座を開きました。

父が亡くなって母はあちこちの聞法会に足を運びました。私は母の聞くに徹した姿が忘れられません。

嫁いだ小島家の父母は岐阜県の本曾川沿いの村の出身で、蓮如様の通られた道筋の人らしく信心の固い人達でした。

私はこれ等の人に育てられました。迷いがなかったと云えば嘘になりますが、聴聞しているうちにいつしか消えていったように思います。

小島 正子

【報恩講のご案内】

表紙でもふれましたが、十一月は親鸞聖人の報恩講です。

親鸞聖人は弘長二年（一二六二年）十一月二十八日に九十歳で亡くなられました。のこされたお徳をしのび、毎月二十八日には門弟たちによつてお念仏の集まりがおこなわれるようになりました。これがさらに広がって曾孫の覚如上人によつてその法要の基本となる形ができあがりしました。この集まりを「講」といったのです。

聖人のご恩に報い、念仏の教えを共に聞き、よろこびあうということから「報恩講」とよばれるようになりました。

本山（東本願寺）では毎年十一月二十一日から二十八日までの八日間勤められます。各お寺でもそれと前後して報恩講が勤められるのです。

私たち真宗の門徒にとつて一年でもっとも大切な行事です。

ぜひお参りください。

記

日時 十一月十三日（日）午後二時より

法要

法話

絵説き説教

お齋



今年には法話のところ、めずらしい「絵説き説教」をやります。

末寺には親鸞聖人のご生涯を絵にして、それを四幅の掛け軸に仕立て上げた、本願寺聖人親鸞伝絵（通称御絵伝）というものがあります。当寺の御絵伝は江戸中期から後期にかけてのもので、近年傷みが目立つようになってきましたので去年と今年の二年間で四幅全ての修復をいたしました。今年はその完成記念ということもあり「絵説き」をやります。これは御絵伝中の聖人のご生涯の場面々々について説教師が朗々とお話されるものです。

といましても現在この絵説き説教をする人がほとんどおられず、今回はテープをかけてみなさまと一緒に聞きたいと思えます。

【お知らせ】

十一月十日（木）午前九時より

本堂の仏具のお磨きをいたします。



十一月十三日（日）午後二時より

報恩講のお勤めを行います。

十二月二十日（火）午前九時より

本堂の仏具のお磨きをいたします。

【編集後記】

「求道会」では「正信偈」を習い、今は「観經」を読んでいます。

毎月 第二金曜日 午後二時からです。日常の言葉で、住職様の言葉添えがあつて、その時は、よく理解できます。

一人になって再読してみると、原文だけが頭を素通りして行きます。

次の求道会で又話し合つて少し理解が深まります。

そういうことをくり返していく内にだんだん私のものになっていきます。

七月八日、求道会と同時進行で「慈雲」の企画会議、二十七日編集会議が行われました。

敗戦の昭和二十一年、新制一年生となつた私が始めて目にしたカベ新聞の追体験でありました。

若いメンバーが、得意のパソコン、イラストを駆使して下さり、レイアウトが出来上がりました。この「慈雲」が長く続くことを祈りながら、わくわくしているのです。

皆様の投稿をお待ちしています。

堺 暉代

【おたより募集】

ふと見聞きしたこと、疑問に思うこと何でも結構です。お送り下さい。「慈雲」に掲載させていただきます。

宛先は表紙に有ります瑞蓮寺慈雲会へ。

おたより、楽しいイラスト等、郵便、メールにて待ちしております。